



Title	日本書紀私記の研究
Author(s)	山口, 真輝
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44779
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 やま 山 ぐち 口 ま 真 き 輝

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 18315 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科国文学専攻

学 位 論 文 名 日本書紀私記の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 蜂矢 真郷

(副査)

教 授 金水 敏 助教授 岡島 昭浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、御巫本を中心とする日本書紀私記について、日本書紀および日本書紀諸本の古訓等との比較を通じて、国語学的に検討するものである。

第一篇「日本書紀私記について」は、第一章「現存日本書紀私記について」、第二章「乙本系統日本書紀私記について」からなり、第二篇「御巫本日本書紀私記にみられる問題について」は、第一章「日本書紀由来の見出しについて」、第二章「御巫本日本書紀私記の配列順序（副題略）」、第三章「御巫本日本書紀私記の万葉仮名について」他からなり、第三篇「御巫本日本書紀私記と日本書紀古訓」は、第一章「御巫本日本書紀私記と圓威本日本書紀」、第二章「御巫本日本書紀私記の和訓と日本書紀古訓との比較」、第三章「御巫本日本書紀私記の複数訓の性格」、第四章「御巫本日本書紀私記と一峯本日本書紀」、第五章「御巫本日本書紀私記とト部家系書紀（副題略）」からなる。冒頭に「はじめに」を、末尾に「おわりに」を付す。（400 字詰換算約 470 枚）

第一篇は、日本書紀私記についての研究状況について述べる。第二篇は、御巫本の配列順序、御巫本の万葉仮名などについて検討する。御巫本の配列順序は、日本書紀と大きく異なる箇所があり、そうした箇所は「一書」の部分で訓注のある箇所であることから、日本書紀と大きく異なる配列順序は訓注を契機とするものであるとしている。御巫本の万葉仮名は、片仮名から書き改めたものと見られているが、稀用万葉仮名については、もともと万葉仮名表記されていたものを取り入れた可能性があるとしている。第三篇は、御巫本と日本書紀諸本の古訓等とを比較し検討している。これまで、御巫本の依拠する日本書紀の訓の系統は不明であったが、それが非ト部家本系のものであることを示している。また、台湾大学蔵圓威本日本書紀について調査し、その万葉仮名傍訓が御巫本に極めて類似していることを明らかにしている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

日本書紀の成立後、奈良時代から平安時代にかけて朝廷で行われた日本書紀の講義の記録である日本書紀私記の中で、応永三十五（1428）年、髪長吉叟（道祥）の書写による御巫本は、乙本系統のものであり、現存最古の書写にかかるものである。御巫本は、その配列順序が日本書紀と大きく異なる箇所があり、また、その万葉仮名は片仮名から

書き改められたものと見られ、そして、依拠した日本書紀の訓の系統が不明であるなど、西宮一民氏、大野晋氏らの研究があるにも拘わらず、資料として扱いにくいものであった。

これに対して、本論文は、以下のことを明らかにしている。

まず、御巫本の配列順序が日本書紀と大きく異なることは、日本書紀の講義の姿を反映しているとする説もあったが、その箇所は日本書紀の「一書」の部分であり訓注のある箇所であることから、それまでに項目として採っていないことに訓注により気づいて前に戻ったものであることを示し、日本書紀の講義の姿を反映したものではないとしている。次に、御巫本の万葉仮名は、基本的には片仮名から書き改められたものと見られるが、稀用万葉仮名は、訓注の影響によるものや濁音専用仮名が見えるなど、古くから万葉仮名表記されていたものを取り入れた可能性があるとしている。また、御巫本の依拠した日本書紀の訓は、ト部家本系のものではなく、一峯本・丹鶴本など非ト部家本系のものであることを、日本書紀諸本の古訓等と比較し複数訓その他を検討することにより示している。

これらの点は、問題の多かった御巫本の位置づけを相当にはっきりさせたものであり、評価できる。とりわけ、台湾大学蔵圓威本日本書紀（非ト部家本系）の万葉仮名傍訓が、不審訓等の一致を含めて御巫本と極めて類似していることを明らかにしたことは重要である。圓威本は、これまで中村啓信氏の紹介等が若干あるのみで、十分に検討されていなかったものであるが、現地で直接に調査の上、その実体を報告している。

他方、明確にするにはいろいろ困難な点を予め持っているのではあるが、御巫本について、本論文で未だ明らかになっていないことは少なくないと言わなければならない。また、依拠する日本書紀とされる非ト部家本系にしても、古本系とされるものとその他のものとを単純に一括できない面があると言えよう。わかりにくい点もあり、あるいは、さらに述べる事が可能であろうと見られる事柄もある。しかしながら、本論文は、圓威本の調査検討をはじめとして評価できる内容を多く持っており、日本書紀私記の甲本・丙本の研究も含めて、こうした問題点は今後克服されることが期待されよう。

なお、2004年2月18日、本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。以上のようなので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。